追悼　徳永康元先生

佐　藤　純　一

戦後の早い時期から本学会の委員として長年学会の運営に尽力され，また，70年代の初めから今年に至るまで評議員として，引き続き五十年以上にわたり学会の活動の拡大発展に貢献された徳永康元先生は，本年4月5日朝心筋梗塞のため自宅で急逝された．4月2日に九十一歳の誕生日をお元気で迎えられ，普段はご逝去の前日までいろいろな訪問者と近くの喫茶店で談笑されることの多いご日常だったので，ご遺族をはじめお近くにいてお目に掛かる機会に恵まれた我々にとっても，全く予期できない急なお別れとなった．

徳永康元先生は1912（明治45）年東京のお生まれで，父君重康氏は化石のトクナガゾウの発見命名者として著名な地質学者で早大教授，母堂元子様は明治初期の東大の医学部教授で日本初の百科全書編者の一人柴田承桂氏の息女という，優れた学者の家系に生を享けられた．先生は東京高等師範付属中学校から東京府立高等学校を経て東京帝国大学文学部言語学科に進学，1936年に卒業された．専攻はハンガリー語を中心とするウラル語学で，当時の日本では専門家のいない未開拓の分野であった．

卒業後大学院に在籍して暫く東大図書館に勤務ののち，1939年晩秋にハンガリー政府招聘の交換留学生としてハンガリーに渡航，ブダペスト大学で研究に従事する傍ら，同大学の日本語講師として授業を担当された．しかし，日米開戦にともなう在外留学生の帰国命令により，1942年5月ブダペストを離れ，ブルガリア，トルコ，カフカスを経てカスピ海を横断し，中央アジア，シベリア，満州を経由する一ヵ月余の長旅で無事帰国された．

1943年1月から文部省が新たに設立した民族研究所に助手として勤務されたが，大陸各地の現地調査に従事され，終戦時はたまたま満州におられたため，大変なご苦労の末ようやく帰国を果たされたと聞く．

戦後間もなく1947年に東京外事専門学校教授に就任，言語学と民族学の講義を担当されたが，49年学制改革により同校が東京外国語大学に改編されるに伴い同学教授となり，1975年に停年退官されるまでその任に当たられた．その間72〜74年には同学付置のアジア・アフリカ言語文化研究所（いわゆるAA研）の所長職も務められた．

退官後は直ちに関西外国語大学教授に就任，以後二十五年にわたって言語学講座の担当を続けられたが，2001年辞任された．なお，その間1984年には勲三等瑞宝章の叙勲に与かり，また，2001年にはハンガリー大統領の来日に際し最高栄誉勲章を授与された．

徳永先生はウラル語学とくにハンガリー語学文学研究の日本における開拓者であるとともに，1930年代のヨーロッパの言語学の新しい潮流となったプラーグ学派の構造主義的音韻論の実際をいち早く日本の学界に紹介した気鋭の学者としても記憶さるべきであろう．すなわち，大学を卒業された1936（昭和11）年の雑誌『方言』の特別号には，先生の訳によるハンガリーのラズィツィウス（Laziczius Gyula 1896–1957）の「音韻論入門」が掲載されたが，これはハンガリーにおけるこの分野のリーダーであった彼の論文「音韻論について」（1930）の全訳であり，先生が如何に当時の学問の最新の動向に精通し，鋭敏な感覚で反応されたかを示す好例といえよう．ちなみに有坂秀世氏の『音韻論』が出たのはその四年後であった．先生はまた，N. S. Trubetzkoy の Grundzüge der Phonologie（1939）にも深い関心を持たれ，親しかった亀井孝氏と一緒に戦後間もなく精読された由でその内容を詳しく把握しておられた．1954年には東京外語大で松山納，小沢重男らの諸氏と，J. Cantineau の仏訳（1949）と対照しながらの同書の輪読会を続けられ，筆者にも参加を許されたことを記憶している．

ウラル語学およびハンガリー語学文学研究の領域でのご業績については，残念ながら正確に論評できる立場にはないので，主要な著作のタイトルを年代順に挙げるに留めるが，「ハンガリー語の起源」（雑誌『民族学研究』1939），「ハンガリーにおける近年のフン研究について」（雑誌『民族学研究』1949），「フィン・ウゴル語の語頭のs音について」（雑誌『言語研究』15号1950），「レグリとその業績」（『金田一京助博士古稀記念言語民俗論叢』三省堂1953），「ハンガリー語」

（『世界言語概説』下巻　研究社 1955），「felszem（片目）考」（雑誌『国語研究』9号　国学院大学国語研究会 1960），「ハンガリーの文学」（世界の文学史第7巻『北欧・東欧の文学』明治書院 1967），「ウラル語族」（『言語の系統と歴史』岩波書店 1971），「ハンガリー語の辞書」（『私の辞書』丸善 1973），「ハンガリーのアジア研究」（『東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究』9号 1974），「ハンガリーの古文献」（『松山商科大学論集』1975）などがある．

徳永先生はハンガリーの文学作品の訳者としても知られ，モルナールの『リリオム』（岩波文庫 1951），同じく『バール街の少年たち』（講談社 1961），『アディ・エンドレ詩集』（恒文社 1977），バラージュの『ほんとうの空色』（講談社 1979），同じく『青ひげ公の城』（恒文社 1998）などはとくに読書界で高い評価を得た．また，オルトゥタイの『ハンガリー民話集』（石本礼子氏他編訳　岩波文庫 1996）は徳永先生の監修・監訳によることがその「あとがき」に記されている．

古シベリア諸語の記述やシベリア民族誌をはじめ様々な分野の文献の幅広い蒐集家である一方，無類の古書通であられた先生は，また，数多くの名エッセイの著者としても令名があり，その珠玉の文章の数々は『ブダペストの古本屋』（恒文社 1982）および『ブダペスト回想』（恒文社 1989）の二冊に収められている．

ハプスブルグ帝国の学術と文化の余光褪めやらぬブダペストで学ばれた体験に発するバルカン・東欧の諸民族の文化の該博な知識と，その地域の研究の現代的意義の深い理解とを体現された先生は，勤務先の大学の枠を超えて訪れるこの分野の後進を気軽に迎えられて，同好としての会話を楽しまれる一方でそれぞれに的確な助言や指導を与えられるのが常であり，そうした多くの誰からも究極の師として慕われた．ことばのあらゆる良い意味での dilettante としての長い生涯を心行くまで追求された先生のご冥福を心からお祈りする次第である．